令和４年度

福祉教育読本「ともに生きる」感想文集
福祉絵画コンクール受賞作品集

ともだち

社会福祉法人　宗像市社会福祉協議会

はじめに

福祉にかかわる心は、大人になって急に芽生えるものではありません。幼児期からの生涯学習のなかで育まれるものと考えています。

宗像市社会福祉協議会では、福祉教育を地域福祉計画の一つの柱として掲げ、事業を推進しています。この事業の一つとして、毎年、福祉教育読本「ともに生きる」の感想文と福祉絵画を募集しており、優秀な作品に対して表彰をしています。

「ともに生きる」感想文は、市内小学校五年生に応募していただき、福祉絵画には市内の保育園・幼稚園から高校生まで募集し、５１８名の参加がありました。これらの作品は、いずれも心温まる思いやりや、福祉の心にあふれる素晴らしいものでした。

この福祉事業の推進にあたりましては、先生方をはじめ、たくさんの関係者にお世話になり、誠にありがとうございました。

なお、この事業に用いた福祉教育読本にかかる経費などには、赤い羽根共同募金による配分金が充てられており、共同募金がこのようなところにも使われていることをお知らせしながら、皆さまの日頃からのご協力に厚く感謝申し上げます。

令和五年二月

宗像市社会福祉協議会　会長　吉田益美

福祉教育読本「ともに生きる」感想文　目次

☆会長賞　「わたしの妹」を読んで　河東西小学校　櫻木　龍之介　6
☆金賞　支えられている側の自分　赤間西小学校　谷口　花　6
☆金賞　「親切なつもりでも」を読んで　日の里東小学校　安部　帆夏　7
☆銀賞　「知らなかったですむことじゃない」を読んで　日の里東小学校　石橋　凌空　8
☆銀賞　「ともに生きる」を読んで　赤間小学校　山本　駿吏　8
☆銀賞　「通勤中のできごと」を読んで感じたこと　河東小学校　林　明里　9
☆銅賞　「ともに生きる」とは　日の里西小学校　栗山　涼樹　10
☆銅賞　「ともに生きる」を読んで　赤間小学校　大平　爽音　11
☆銅賞　不便だけれど、不幸だとは思わない　河東西小学校　石井　一樹　11
☆銅賞　「ともに生きる」とは　日の里西小学校　ブーヴィエソフィア　百合　12

☆優秀賞　計22作品

☆優秀賞　「いつもの公園」　吉武小学校　治井　凜　13
☆優秀賞　「親切のつもりでも」を読んで　赤間小学校　日高　ひまわり　13
☆優秀賞　「ともに生きる」を読んで　赤間小学校　倉岡　萩乃　14
☆優秀賞　「ともに生きる」を読んで　赤間西小学校　濱岡　更紗　15

☆ 優秀賞 人とのつながり 河東小学校 吉田 鈴 15
☆ 優秀賞 みんなのために 河東小学校 江口 菜々 16
☆ 優秀賞 「通勤中のできごと」を読んで 河東小学校 真木 ひより 16
☆ 優秀賞 おじいさんから習った竹トンボ 河東西小学校 岡﨑 翔太郎 17
☆ 優秀賞 耳が聞こえない人から学んだ２つのこと 河東西小学校 足立 彩芭 18
☆ 優秀賞 「親切のつもりでも」を読んで 南郷小学校 幸田 優里 19
☆ 優秀賞 「まさるちゃんのいのち」を読んで 南郷小学校 帰山 美月 20
☆ 優秀賞 目がみえなくてもかわいそうではない 東郷小学校 水田 千絵子 20
☆ 優秀賞 人の大切さ 東郷小学校 郷田 結愛 21
☆ 優秀賞 私のおじいちゃん 東郷小学校 平山 芽唯 22
☆ 優秀賞 野球大会 自由ヶ丘小学校 井上 実祈 22
☆ 優秀賞 「ともに生きる」を読んで 自由ヶ丘小学校 佐藤 平 23
☆ 優秀賞 ぼくのボランティア活動 自由ヶ丘小学校 早川 暖史 24
☆ 優秀賞 〈無題〉 自由ヶ丘南小学校 吉田 蓮 24
☆ 優秀賞 知らなかったですむことじゃない 玄海小学校 毛利 瑛太 25
☆ 優秀賞 目が見えないという「不安」 玄海東小学校 井土 愛香 26
☆ 優秀賞 特別ルールは親切？ 大島学園 金川 陽愛羽 26
☆ 優秀賞 福祉を勉強した私 地島小学校 浦川 芭菜 27

福祉絵画コンクール受賞者　目次

金賞

☆ 中学生の部　思いやりの花咲かせよう　自由ケ丘中学校　加藤 咲太郎　30
☆ 小学高学年の部　差し伸べた手がつなぐ未来　日の里東小学校　岩本 雛乃　30
☆ 小学低学年の部　助け合ってくらしやすいせかいへ　河東小学校　大圃 遥人　30
☆ 幼児の部　ひいおばあちゃんとぼく　日の里幼稚園　平川 元翔　31

銀賞

☆ 中学生の部　一瞬の行動力が、一生の感謝に　日の里中学校　伊藤 千廣　31
☆ 中学生の部　できる事から始めよう　大島学園　宮本 彪斗　31
☆ 小学高学年の部　みんなでスマイル　自由ケ丘南小学校　福山 ひまり　32
☆ 小学高学年の部　思いやりを大切に　玄海小学校　仲野 宝華　32
☆ 小学低学年の部　あふれるやさしさ　日の里西小学校　江尻 彩　32
☆ 小学低学年の部　いつまでも 元気にいてね　自由ケ丘小学校　谷口 雅仁　33
☆ 幼児の部　ずっとずっと元気でね！　野ばら第二保育園　関根 ゆず　33
☆ 幼児の部　おねえねとおにいに だいすき！　東郷信愛幼稚園　川上 結梨　33

銅賞

☆	中学生の部	世界と共に生きる	河東中学校	松木　亜湖	34
☆	中学生の部	前へ“進めない”	日の里中学校	井上　彩乃	34
☆	中学生の部	福祉のパズル	城山中学校	久保　桃花	34
☆	小学高学年の部	自分に出来る事	南郷小学校	岡田　桃果	35
☆	小学高学年の部	久しぶりに会ったじーじとばーば	自由ケ丘南小学校	藤木　入李	35
☆	小学低学年の部	すみやすい町	河東西小学校	髙野　叶絵	35
☆	小学低学年の部	みんななかよく	赤間西小学校	追木　奏人	36
☆	小学低学年の部	えがおのひまわり	東郷小学校	古賀　咲愛	36
☆	幼児の部	おにいちゃん、いつもありがとう	博多のびっこ幼稚園	鈴木　望華	36
☆	幼児の部	ママといっしょにあそんでたのしいな	浄徳寺幼稚園	下妻　百花	37
☆	幼児の部	おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に行ったお散歩	野ばら保育園	元日田　陽	37
☆	幼児の部	大好きな家族	日の里西保育園	西橋　ひかり	37
☆	幼児の部	ともだち　だいすき	玄海風の子保育園	宮本　結珠愛	38

会長賞

「わたしの妹」を読んで

河東西小学校　櫻木　龍之介

この本のまり子は知的障害ですが、私も自閉症スペクトラム障害という軽い障害を持っています。だからまり子の気持ちがわかるような気がして読み進めました。

私の障害がわかったのは、二才の時だったと聞きました。母が二才の私が全くしゃべることが出来ないのをおかしいと思い、病院へ検査に連れて行き、障害名がつきました。まり子のお母さんも一生けん命にまり子をはげまして学校へ連れて行ったとのことですが、私の母も小さい私をりょう育し設に連れていき、沢山の経験をさせてくれました。おかげでいまは楽しく学校へ行くことが出来ていますが、とてもつらい時もありました。

私もまり子のように友達と仲良くすごしたいと思っていても、どうしても声をかけられない事があります。それは声をかけようとすると、言葉が全部消えてしまう感じがするのです。その時は自分に自信がなく、一人でいるしかなくてとてもつらかったです。

私は障害があるのが当たり前なので、普通の子供の気持ちや考えはわかりません。ぎゃくに障害のある人の気持ちはわかりづらいと思いますが、たとえば、うれしい、楽しい、悲しい、つらい、さびしいなどの気持ちは、みんな同じだと思います。心はみんな同じです。

まり子は藤本さんとフォークダンスをして楽しかったようですが、藤本さんもまり子とのダンスは楽しかったようです。楽しいと思う気持ちはみんな同じなので、相手が楽しいと思うことをいっしょにやれば差別は生まれないと思います。障害があるなし関係なく、相手がいやな気持ちになることをしなければみんなが仲良くくらせる社会になると思います。

金賞

支えられている側の自分

赤間西小学校　谷口　花

私は「ともに生きる」を読んで自分が多くの人に支えられていることを思い出しました。お母さんお父さんなど家族や友達、近所の人に通学路にいるおじさん、おばさん。たくさんの人が自分を支えてくれています。この中で思ったのは、祖母ことおばあちゃんです。「ともに生きる」の本の中に「ずっとずっとわたしのおじいちゃん」というお話があります。このお話を読んで、私はとても共感しました。なぜなら、祖母と私の関係にとっても似ていたからです。祖母は交通事故にあって、病院を退院した後、一緒にくらすこ

とになりました。事故で右目の視力が下がっていて、もの忘れもひどく、言葉も忘れていました。上手く会話ができなくて、イライラする私でしたが、少しは祖母の言いたいことが分かるようにはなりました。お母さんに「おばあちゃんには、やさしくね。」と言われていたのもあり、祖母のサポート係にいつのまにか、なっていたんじゃないかと思います。

４年生から５年生に上がってからは、何故か祖母に対してイライラがつのってきました。話は全く通じないし、ちょっとしたことですぐにおこる祖母がきらいになっていました。ですが、「ともに生きる」を読んで、「おばあちゃんに支えられている」ということに気付きました。私は、祖母にたよってもらっていたんだなぁと思います。「たよられる」ことも「支え」の一つだと気付きました。私からすれば、祖母はイライラしてしまう相手。しかし、祖母からすれば、私はたよれる存在なのです。祖母にひどいことを言っていた自分がむなしくなりました。お母さんも、「おばあちゃんは、他の人のために行動する、すごくやさしい人だった。」と言っていました。毎日私も支えてもらっている、そして私もだれかを支えることができると忘れずに生きていきたいです。

金賞

「親切なつもりでも」を読んで

日の里東小学校　安部　帆夏

私は、「親切なつもりでも」を読みました。この話は、ゆかりちゃんという左目の視力が悪い女の子がみんなに親切にされてうれしい気持ちもあるけれど特別あつかいをされてみんなと同じようにあつかわれていないことが悲しくなったというお話でした。ゆかりちゃんは、左目が悪くても右目は見えるから、くじけないという強い気持ちのある女の子なので、周りの人からすれば親切な心づかいだったかもしれないけれど、自分だけ失敗をゆるされたり特別あつかいされたりするのがくやしかったようです。私は、体の不自由な人にはやさしくしようと思っていたので「このわたしを特別あつかいしないで。ほかのみんなと同じようにあつかってよ。」というゆかりちゃんの言葉にびっくりしました。

私は、スポーツの習い事をしています。その中には、足の不自由な子がいて歩行器やつえを使って活動しています。リレーをしたりフリスビーをしたりするのでどうしても同じメニューができないことがあります。その時は特別ルールや別のメニューをしています。また、体育館への出入口に段差があるのでその時は周りの人に手伝ってもらっています。その光景を私は当たり前に思っていたけれどもしかすると

その子は、ゆかりちゃんと同じ思いをしている時があるかもしれないと思ってハッとしました。

体が不自由な人や困ったことがある人に声をかけたりお手伝いする時は、自分の気持ちをおしつけるのではなく、相手が何をしてほしいかを考えたり聞いたりして行動しようと思いました。

銀賞

「知らなかったですむことじゃない」を読んで

日の里東小学校　石橋　凌空

ぼくがこの話を読んで一番問題だと思ったことは、教室にいるみんなが見て見ぬふりをしていたことです。ごろう君とまさおみ君が命令したことも悪いけれど、それを知っているみんながだれ一人声をかける勇気を持てずいじめも大きくなり、結局何の解決にもなっていないからです。

もしもいじめがどんどんひどくなると、いじめられた人は学校に行きたくなくなり、家で引きこもったり、最悪の場合、命を絶つこともあるかもしれません。そうなるといじめた人も、見て見ぬふりをした人も同じはんざい者になってしまいます。

もしぼくのクラスでこういういじめがあったら、ぼくはまずその場でいじめを止めて、いじめをした人にいじめた原因を聞いた後にぼくの意見を伝えます。それでも解決できなかったら、先生にいじめがあっているということを報告したいと思います。

いじめをしている人に声をかけるということは、勇気がいることです。少しでも多くの人がこの小さな勇気を持つことで、いじめがなくなると思います。

ぼくも時々友達に対してじょう談で「うざい」などのあらい言葉を使ったりすることがあります。ぼくはじょう談のつもりでも、相手はその言葉にきずついて心を痛めているかもしれません。それも言葉のいじめの一つだと思います。これからはまず、相手の気持ちを考えて言葉を使うようにしていきたいです。

ぼくのクラスにはいじめがありません。それはケンカがあっても、見て見ぬふりをせずにだれかが必ず声をかけていてその場で問題が解決できているからです。これからもクラス全員が学校で楽しく過ごせるようにぼくは思いやりの気持ちを大切にしていきたいと思います。

銀賞

「ともに生きる」を読んで

赤間小学校　山本　駿吏

この本には、体や心に障害がある人の話が、十三話に分けて書かれていました。その中でぼくが一番心に残った話は二話目の「のぶお君おめでとう」です。障害をもっている子のお母さんが小学校入学への不安な気持ちが、まわりの人の対応で感しゃへ変わり、受け入れる側も、障害がある子と一緒にすごすことで障害がある子への理解を深めていく話です。

のぶお君はじへいてきけいこうを持った子で、周囲のかん境、しげきに強く動かされやすいということで、のぶお君のお母さんは、いろいろなやんでいました。入学した後、クラスの子どもたちにめいわくがかかりはしないだろうか、お母さんの不安な気持ちを聞いて、先生方は早く学校になれた方がよかろうと、毎週土曜日は、ようち園を休み、学校の一年四組に席を作って、ふんい気になれるようにしたり、先生方が自宅に行きあそんでくださっていました。のぶお君もお母さんもきっとこのような準備期間があり少しずつ安心できていたのだろうなと思いました。

次にうけいれた学校のお友達がのぶお君のことを理解し、かん境をつくり「心配なんかいらないんですよ。」と言えるようにしたい、むねをはって学校にこれるようにみんなでがんばりたいと思うと言ってくれたことに、よんでいて心があたたかくなりました。学校の先生たちは、保ご者のみなさんへのぶお君のことを手紙にして家庭での子どもに対する語りかけの協力をし、ともに生きるような温かい人間に育てたいと伝えています。

ぼくもＡＤＨＤという発達障害があります。周りの音やかん境、しげきに気持ちが動かされやすく感情のコントロールも苦手です。でも今ぼくは周りの人にぼくの発達障害のことを理解してもらい、学習できるかん境を作ってもらい、毎日楽しく学校へ通えています。発達障害と言われるけど、これはぼくの個性なんだよとお母さんは言っています。ぼくらしくみんなと一緒に生き生きと生活できるように支えてくれている先生、友達、家族を大切にしたいと思いました。

銀賞

「通勤中のできごと」を読んで感じたこと

河東小学校　林　明里

「ともに生きる」という本を読んで「通勤中のできごと」が一番心に残りました。私は、障害者の人を見かけたらてつだってあげないとい

けないと思っていたし、点字ブロックの上をいつも歩くのだと思っていましたが、障害者の人たちも色々な考えをもっているのだと、この話を読んで知ることができました。

「通勤中のできごと」の内容は、全盲の人が通勤しているときに、

「あなたの歩く所はこっちよ。」

と言われ点字ブロックの方につれていかれました。しかし練習したり白杖を使ったりすれば点字ブロックの上でないとこでも歩ける場合があることを伝えています。視覚障害者にとって点字ブロックは、あれば安心だし助かるものですが、使わない方が近道だったり、上に自転車が置いてあると、歩きづらい時もあると書いてあり、点字ブロックを使わないほうが便利だったり、安全な場合があると知りました。

私は、障害者の人達は今まで色々なことを手伝わないと生活しづらいと考えていました。しかし、練習したり、工夫したりしてできることは自分でやりたい人もいるんだと感じました。そのことは、障害者の人達だけではなく、私も同じです。できることは自分でやるし、助けてほしい時もあるので困っている人がいたらやさしく声をかけてみたいと思います。

銅賞

「ともに生きる」とは

日の里西小学校　栗山　涼樹

ぼくは、「ともに生きる」という本の、「通勤中のできごと」というお話を読みました。永吉さんは生まれつき目が不自由です。しかし、点字ブロックを使いません。白杖を使えば歩けるし、点字ブロックを使わない方が近道だったり、同じ方向に歩く人の流れに乗ったほうがスムーズに歩くことができる時もあったりするそうです。もし目が不自由だったら、点字ブロックを使いますが、これを聞いて、使わないのも良いかもと思いました。

四年生のころに、ぼくはアイマスク体験をしました。アイマスクを付けたしゅんかんに目の前が真っ暗になり、いきなり心細くなりました。友達と手をつないで、体育館の周りを一周しました。少しの間でもこわいのに、目が不自由な人はこれがずっと続いているのです。とてもおそろしいです。また、目の不自由な方の生活をえい像で観ました。観ていると、ぼく達の生活とは全然ちがいました。目が見えるのと見えないのとでこんなにちがうんだと思いました。

ともに生きるとはどういうことなのでしょうか。ぼく達の生活とは全くちがう、色んな生活をしていますが、それでもともにみんな生きています。同じ人間として、例えちがっていても、同じ様にみんな生きて

いくということだとぼくは考えています。これからも、体の不自由な人達などとも、みんながすごしやすい社会を作っていきたいです。

銅賞

「ともに生きる」を読んで

赤間小学校　大平　爽音

私は、「ともに生きる」を読んで、親切のことをあらためて大切なんだなと思いました。

特に、『親切のつもりでも』では、主人公のゆかりが左目が悪くなり、三角パスのときにボールを落としてしまったときに、とし子さんが「ゆかりちゃんだけはいいよ。ボールを落としても許してあげる」といいました。

この文を読んだとき、「親切で言ったと思うけどこれもこれできずつくよね。」と思い、また、親切も大事だけど、言葉を発する前に相手の気持ちを考えて言うのも大事だなと思いました。

さらに私は、人権のことも大切と思いました。

P88の『人間の権利』にかかれていた、「人が人間らしく生きることを『人権』といいます。」を読んで私はとても大切なことだと思いました。わけは、もし、体のどこかに障害をもっている人がいて、いじめを受けていたらそれは『人権』とはいえないと思うからです。なぜなら、そもそも人は仲良く、たまにケンカして、でも仲直りして、そういう生活が、「人が人間らしく生きる」ことだと私は考えているからです。

このように、親切のつもりで相手がきずつくような言葉を言ってしまったり、人権とぎゃくなことをしてしまったときなどがあったときは、自分がした行いを見直してあやまることを心がけ、また、友達がそのようなことといわれたら言った人に「今のは、よくないよ」ときっぱりいえるような人になりたいと強く思います。

銅賞

不便だけれど、不幸だとは思わない

河東西小学校　石井　一樹

お話の主人公は、耳が聞こえない障害を持っています。ほちょう器をかけていても、相手が何を話しているのか分からないので、ふだんは読話をして生活をしています。読話とは、しゃべっている人の口を見て何を話しているか内容を読み取っていく方法です。

このような人は、ほかにもたくさんいると思います。特に、今はコロナの時期で、みんなマスクをして過ごしているから耳の聞こえない人

たちは、とても困っているのではないかと思いました。

主人公が、学校の授業の時に先生の口を見ていると、先生から「君はなぜ人の顔ばかり見て、教科書を見ないのか。」と注意されました。その時は説明しようとしたけれど、思わずなみだが出かかって声にならなかったそうです。そのような時は、自分だけがべつ世界にいるように思えて、まるで何もない世界にとじこめられたような気持ちになるそうです。ぼくは、障害を知らない人や障害に理解がない人がいるということに悲しい気持ちになりました。

手話の大切さは、主人公も分かったし、ぼく自身もコロナの中でマスクしているじょう態でも手話ができたら、みんなが困らないで勉強や生活ができるなと思いました。主人公もまわりの人たちが理解してくれて、手話での卒業式に参加できたからよかったなと思いました。

主人公の言葉の中に「わたしのそばには必ずといっていいほどだれかがいて、はげましてくれたり、忠告をしてくれたりしました。そのおかげでむしろ幸せを感じる。」と書いてありました。ぼくにも友達がいて、いつも家族がいて、落ちこんでいるときや困ったときにはげましてくれる。障害があってもなくても、その気持ちは同じだと感じました。これから、障害がある人や困った人がいた時は、話を聞いたり、支えたりすることが大切なのだということを知りました。

銅賞

「ともに生きる」とは

日の里西小学校
ブーヴィエソフィア 百合

私は、「ともに生きる」という本の「通勤中のできごと」というお話を読んで視覚に障がいがあるということは同じでも、見え方、考え方、得意なこと、不得意なことなどいろいろな人がいることを改めて知りました。点字ブロックがなくても歩ける人はいるけれど点字ブロックがないと歩けない人などいろいろな人がいるからこのお話にでてきた女性のように助け合いがとても大切だと感じました。

三・四年生の総合の学習では、障がいのある人について勉強をしました。視覚に障がいのある人の思いを知るためにアイマスク体験をしました。歩きづらく、とてもこわいことが分かりました。点字体験をしたときも点字を覚えるのに、時間もかかるし、すぐには読めるわけではないのでとっても大変だということが分かりました。

私は、「ともに生きる」の意味について考えてみました。不自由なところがあるのは、人それぞれだし、アレルギーがあるのも人それぞれで

す。だから、その人を特別あつかいしてはいけないと思います。同じ人間だから、同じように生きていく。それが
「ともに生きる」
という意味だと思います。

優秀賞

いつもの公園

吉武小学校　治井　凜

「いつもの公園」は主人公たけしが公園でおばあさんと出会い、公園の花植えを手伝うお話です。
いつも遊んでいる公園でおじいさん、おばあさんが大変な作業をしていることを知って、たけしは「ありがたい」と思ったことしょう。たけしは花植えを手伝います。最後に前よりもはなやかになった公園や植えた花を、にこにこしながら見ていました。」と書いていました。
私は、「何か親切をしたら必ず良いことがあるよと」筆者が教えてくれていると思いました。
実際に、私の家の近くには、たくさんのおじいさんやおばあさんがいます。
前にもこのようなことがありました。
おばあさんが重たい荷物を持っていたから「家までその荷物を持ちましょうか」と聞きました。するとおばあさんは「家が近いから大丈夫。」と言われました。
実際に荷物を持つことはできなかったけれど、自分が声をかけることができたことが嬉しかったです。
このような体験があったから、たけしくんの手伝う勇気がよくわかり、たけしくんはすごいなあと思いました。
今後も、同じような場面があった時は、手伝う勇気を出し、親切に接していきたいです。

優秀賞

「親切のつもりでも」を読んで

赤間小学校　日高　ひまわり

私は、このお話を読んで言葉は大切だと思いました。
わけは、少しの言葉の発言だけで自分は気づかないけれども相手は心の中できずついているからです。私もゆかりの立場でとし子さんに同じようなことが言われたら、私は目が悪いから特別あつかいすると思うけど自分の立場からするとみんなと同じようにせっしてほしいなあと思いました。それに相手に言いたくても言えないと言うのはとても共感できるなあと思いました。わけは、家族以外だと仲の良い友達や親友でも自分の言いたいことを言えるものもあるけど言えないものやことの方が多く、がまんをしてしまいがちなのでとても心がモヤモヤします。いつか自分の気持ちを

しっかりと相手に言えるようにしたいです。

これからは、友達や知り合い、家族などと話す時は、発言する前にしっかりそれは、その人や相手に言っていいものかしっかり考えて言葉を言ったりして相手をきずつけたりしないようにする。また、自分の考えや思っていることなどをかくさずに、しっかり相手に伝えるってことをこれから、心や頭に入れたり意識して一日を過ごしたり、生活することが大切なんだなあと思いました。そのようにすると毎日の生活や心の気持ちが変わるのかもいっしょに考えたりして、一日一日を過ごしたいと思います。

優秀賞

「ともに生きる」を読んで

赤間小学校　倉岡　萩乃

私はともに生きるという本を読んで、障害者に気を使うときはしっかり考えるべきだなと思いました。

なぜ、そう思ったかというと、親切のつもりでもというお話で左目が悪い主人公に友達が「あなただけはいいよ」というセリフを言ったのですが、主人公は特別扱いされたことをうれしくは思っていなかったようだったからです。しかし、そのあとの話では、あるていどのサポートは必要というようなことも書かれているので少し気をつけなくてはいけないけどサポートすることについては悪いことではないのかなと思いました。

私は特に不便だけれど不幸だとは思わないという物語がとくに印象に残りました。

なぜなら、耳の聞こえない主人公は卒業式などの先生の話を理解することが大変で休むことが多かったそうですが、高校生の卒業式はでたいと思ったようでした。そのために、クラスの人たちにお願いするなどと方法を考えてさらには実行していました。障害がなくても少し大変なことなのに上手く話すことが出来ない主人公がみんなに話しかけることをやってのけたことがすごいなと思ったからです。

これから私も障害者の人と会うことがあると思います。なのでここで勉強したことや思ったことを大切にして、しょう来に生かすことができたらいいなと思いました。そして、障害者の人ともふつうに関わって仲良くなることができるように社会の技術も発展していったらなおさらいいなと思います。

優秀賞

「ともに生きる」を読んで

赤間西小学校　濱岡　更紗

わたしは、「ともに生きる」という本を読みました。この本は、支え合うというのは何なのか年をとるというのは何なのか障害があるというのは何なのか「ふくし」について、書いてある本でした。

特に心に残っているのは、「おばあちゃんの笑顔」という話です。この話は、まゆみという女の子の二年生のときの話です。まゆみの家のとなりには、おばあちゃんが一人でくらしています。「ある日の夕方、家に帰っているときおばあちゃんがゴミ出しをしているのを見かけて、両手にかかえて、とても重そうにしていたので声をかけて手伝おうと思いました。でも一度も話したことがなかったので声をかける勇気が出ませんでした。次の週もゴミ出しをするおばあちゃんに出会いました。今日のおばあちゃんは「はあはあ」と声が聞こえるくらい大変そうでした。わたしは今日こそはと思い切って

「おばあちゃん、お手伝いしましょうか。」と声をかけました。するとおばあちゃんは、「ありがとうね。」とにっこりほほえんで答えてくれました。それからわたしは、ゴミ出しの日にかかさずおばあちゃんに声をかけて、手伝いをしました。そこが心に残っています。

わたしは、まゆみの手伝おうという気持ちがやさしいなと思いました。「でも一度も話したことがなかったので声をかける勇気が出ませんでした。」の所に共感しました。

わたしは、この本を読んで、こまっている人がいたらまゆみみたいに、思い切って声をかけて、高れい者や手助けが必要な人を助けたり、手伝ったりしようと思います。

優秀賞

人とのつながり

河東小学校　吉田　鈴

わたしは「ともに生きる」という本を読んで、「公民館のおじさんありがとう」というお話が一番心に残りました。理由は、「支え合う」ということを考えさせられると思ったからです。

わたしにとって「支え合う」とは、自分が生きるときに必要なことだと思います。みなさんにとって「支え合う」は、どんなものだと思いますか。

「公民館のおじさんありがとう」は、公民館の管理人の中村さんが地域の安全を守っていることに対しての「こういち」の気持ちのお話です。わたしは、いつでも支え合っていると思います。でもこのお話のよ

うに直接だけではないと思います。例えば、わたしのお母さんがスーパーなどで野菜を買えているのは、農家の人やさまざまな人の関わりがあるからで、「支え合う」というのはさまざな形があると思います。

このお話を読んで、お礼は大切だということが分かりました。このお話を読む前は、その題名どおりだと思っていました。しかし読んだ後は、中村さんは、みんなの「ありがとう」という言葉に支えられているのかなという考えに変わりました。そして「こういち」は勇気があるなと思いました。理由はわたしだったら、勇気がなくてお礼が言えないけど「こういち」は中村さんに当たり前のようお礼をいっていたからです。

最後に、わたしは今まであまり支えてくれている人に興味を持ったり、お礼をいったりできなかったので、これからはお礼を言うのと、なるべく自分もだれかを支えたいと思いました。

優秀賞

みんなのために

河東小学校　江口　菜々

わたしは、「いつもの公園」を読んで、みんなのために活動してみたいと思いました。

「いつもの公園」という話は、公園の花がいつもきれいに咲いていることに気づいたたけしが、おばあさんたちががんばっていると知り、一緒にお世話をする話です。わたしは、この話を読む前は、花やいつも使う場所がきれいなことを当たり前だと思って気にしていませんでした。だけど、この話に出てくるおばあさんたちやたけしのように、みんなが見てないところでもがんばってくれている人たちがいるからなんだと知れました。

わたしはこれから、この話に出てくるおばあさんやたけしのように、地いきでごみ拾いをしたりして、みんなが気持ちよくなれるようなことをしていきたいと思いました。

優秀賞

「通勤中のできごと」を読んで

河東小学校　真木　ひより

わたしは、「ともに生きる」という本を読んで、「通勤中のできごと」という話が、一番心に残りました。その理由は、視覚障害者の気持ちが分かったからです。みなさんにとって視覚障害者とは、どんな人ですか。わたしにとって視覚障害者とは、みんなと同じ人だと思います。

この話は、視覚障害者にとってどんな気持ちなのか、点字ブロックの使い方などを教えてくれる話です。わたしは、四年生の総合の学習で視覚障害者の生活について点字ブロックについて学びました。その時には、点字ブロックの使い方なんて考

えたこともありませんでした。この話を読んで、次のような点字ブロックの使い方が分かりました。いつも使う人、その日の気分によって使う人、なれた場所では使わない人など様々な使い方が分かりました。この話を読む前は、視覚障害者がこまっていたら、助けたらいいと思ってました。しかし、読んだ後は、助ける時は視覚障害者の気持ちを聞いてから助けてあげようと考えが変わりました。

これからは、視覚障害者の気持ちを聞いてから助けるのをがんばりたいです。

優秀賞

おじいさんから習った竹トンボ

河東西小学校　岡﨑　翔太郎

ぼくは、「おじいさんに習った竹トンボ」というお話を読んだ理由は、ぼくも小さいころに、おじいちゃんといっしょに竹トンボを作って飛ばしたことがあるので、このお話に興味を持ったから選びました。

このお話は、5年生と6年生が参加できる竹トンボ作りで老人クラブのおじいさんとおばあさんが竹トンボ作りを教えてくれるお話です。

ぼくがいちばん心に残ったことは、竹トンボ作りは、羽根になる竹の中心のとり方は、コンパスやじょうぎを使わずに、竹くずを半分ぐらいに折って右からと左からナイフで印をつけて、この二つの線の真ん中が中心になり、竹トンボは表を深く、うらを浅くけずってうすい羽根を作ります。竹をけずりすぎたり、羽根が厚すぎるとうまく飛ばず、竹トンボの心ぼうは、ナイフを右手に持って左手で竹をゆっくり引っぱって作る。という場面が心に残りました。

昔の人は、今みたいにゲームや、けいたい電話もなかったので、こうして竹トンボや竹馬、ふえなどを自分たちで作って、みんなで日がくれるまで外で遊んでいたそうです。

ぼくも、小さいころにおじいちゃんといっしょに、竹トンボを作って飛ばして遊んだことがあります。ぼくが飛ばしても、ぜんぜん高く飛ばなかったので、おじいちゃんから高く飛ばすコツを教えてもらって何度も飛ばしたら、だんだん飛ばすことができました。でも、おじいちゃんが飛ばすと、ぼくよりもぐんと空高く飛んだことを思い出しました。

ぼくは、このお話を読んで、今はコロナでおじいちゃんになかなか

会えないけど、いつかまた、おじいちゃんといっしょに竹トンボを作って飛ばしたいです。その時は、おじいちゃんよりもぐんと空高く飛ばしたいと思います。そして、ぼくが大人になったら、子どもたちに、竹トンボの作り方や、飛ばし方を教えてあげたいと思います。

優秀賞

耳が聞こえない人から学んだ２つのこと

河東西小学校　足立　彩芭

私とちがって、耳が聞こえないけど、ふつうの学校に、不便でつらい思いをしてもがんばって行っているのがすごいと思ったのが、私が「不便だけれど、不幸だとは思わない」を選んだ理由です。

読みすすめていくと、じゅ業をしているときに、ある先生に、「きみはなぜ人の顔ばかりみて、教科書を見ないのか。」と注意されて、先生が知らなかったのにビックリしました。なぜかというと、私は、先生が最初から、感音難聴ということを知っていると思っていたからです。

登場人物と自分を比べてみて、もし私が、感音難聴になっていたら、先生の口を見ていて注意されたら、なみだが出かけても、自分の思いをあとから伝えるけれど、なぜなみだが出かけたあとでも、自分の思いを伝えなかったのか不思議に思いました。けれど、もしかしたら、その時はとつ然先生にみんなの前で言われたので声にならず、勇気が出なくて、自分の気持ちを伝えることができなかったのかもしれないと思いました。

また、集会やこう演会などでは、口話だけで進行するので、内容がさっぱり分からず、まるで何もない部屋にとじこめられたような気持ちになったり、自分だけが別世界にいるように思えてくるというのを知って、私だったらとてもたえられないだろうなと思いました。

けれど、高校三年生の時卒業式のことを考えているうちにある決心をしました。学級会で自分のつらい思いをみんなに聞いてもらうということです。この時女の子は少し勇気がわいてきたのかなと思いました。女の子は、「話されていることがその場で分かり、みんなといっしょにいるのだと思えるような卒業式に参加したい。」ということや、手話や指文字を知った時、目の前がいっぺんに明るくなったことや、指文字や手話をいっしょに使ってくれたら、仲間はずれにならずにすむこと。まわりの人がほんのちょっと理解してくれるだけで対等にやっていけることなどをうったえました。すると、みんなは女の子の不安をふき飛ばすように真けんに考えてくれました。

このお話を読んで、女の子が自分をふるいたたせて勇気を持ってみんなにうったえたことで、新しい世界が開けたことを知って私も何かこまったときなどに周りの人に助けを求めたりすることや勇気を出して自分の意見を人に言うことが大切だと学びました。

そして私がもう一つ分かったことがあります。それは、耳が聞こえない人は自分で「不幸」だとか「かわいそう」だとは思ってないかもしれないから、そういう見方をあまりしないほうがいいのかなと思いました。みんなちがってみんないい、それがあたりまえの世界にしたいです。

優秀賞

「親切のつもりでも」を読んで

南郷小学校　幸田　優里

この物語は、左目が悪い主人公ゆかりと、ゆかりがボールを落としてしまったときに、はげましてくれたとし子との会話と、その時のゆかりの気持ちが書かれている物語です。わたしはこの物語をよんで、親切にしているつもりでも、相手をきずつけてしまうことがあるということを学びました。

ゆかりは、五年生になって、左目が悪いことに気が付きました。病院に行ってみると、ずいぶんと視力が落ちていて「治るみこみはほとんどない」と言われるほどでした。しかし、少しでもよくなるようにと治療と訓練が始まりました。毎週水曜日に、大学病院へ通っています。

わたしは、この物語を読むうちに、心に残った場面があります。それは、ミニ・バスケットボールの練習をしていて、ゆかりがボールを落としてしまった時、とし子がゆかりに「ゆかりちゃんだけはいいよ。目が悪いからボールを落としても許してあげる。」と言っていた所です。とし子は、ゆかりをはげましたかったと思います。でも、「ゆかりちゃんだけはいいよ。目が悪いからボールを落としても許してあげる。」という言葉は、わたしにとっては差別しているように聞こえます。どうしてかというと、「ゆかりちゃんだけは」や、「目が悪いから」、「許してあげる」など、差別をする時に使う言葉を使っているからかなと思います。でも、私がもしとし子さんの立場にいたら、ゆかりさんのことは、はげませなかったと思うので、はげますことのできたとし子さんがすごいなぁと思いました。

わたしは、この物語で考えさせられました。なぜなら、失敗や何かをしてしまった人をはげますことは、

かんたんそうで、とてもむずかしいからです。特に、このお話に出ていた主人公のゆかりのような、目の見えづらい人の失敗も、むずかしいと思いました。だから、わたしは、この物語や今までの経験などを生かして、はげます立場になったら、はげましたいと思いました。この物語を、今後に生かしていきたいと思います。

優秀賞

「まさるちゃんのいのち」を読んで

南郷小学校　帰山　美月

私は、「いのち」という言葉にひかれたのでこのお話を読みました。

まさるちゃんは、生まれる時から水頭症という病気を持っていて、児童福祉施設に入園してどんどんより人間らしい生活ができるようになる話です。

かんごしさんの話の「一日でも二日でもより人間らしい生活を・・・」という文章の「より」に・がついているのが気になりました。読んでいくと病気でもまさるちゃんは、まわりの人の力をかりながら、ミルクから始めて果汁、野菜スープ、重湯、みそ汁、そして半年後にプリンやおかゆも食べられるようになりました。人間らしい生活にだんだん近づけようとしていることから、私はうれしくなりました。その他にも手足や視力や聴力の訓練、特別のいすでの移動、家族とのやりとりなどいろんなことができるようになりました。

これは、まわりの人とまさるちゃんががんばったから、いろんなことができるようになったと思います。

気になっていた「より人間らしく」とは、まさるちゃんにとっては、好きな服を着ること、好きな食べ物を食べること、自由に動けること、いろんな人と交わることだと思います。「より」は、「もっともっと人間らしく」という意味でないかなと思いました。

そして、より人間らしい生活をすることは、まさるちゃんだけではなく、私たちみんなが大切にすることだと考えます。

優秀賞

目がみえなくてもかわいそうではない

東郷小学校　水田　千絵子

「通勤中のできごと」を読んで私は、

「点字ブロックを使わなくても大丈夫なんですよ。」

と言ってびっくりしました。私は、4年生の時に、ふくし学習で目が不自由な人の、体験をしました。

その時に点字ブロックがない所をあるいた時に、目がみえてる人と、みえてない人は、全然ちがうということにきづきました。

目がみえていないと、学校でよく通る、体育館の入口がとてもはいりにくかったことを思いだして、点字ブロックがなくても、歩けるのは、すごいなと、思ったからです。

そして、もう１つ思ったことは、点字ブロックの上に自転車をおくのは、ひどいと思いました。まだ点字ブロックを使わないと、歩けない人もいるかもしれないのに、自分が使わなくてもいいからと思って、自転車をおいていいわけがないから点字ブロックの上に、自転車をおくのは、やめてほしいと思いました。

そして、小学校で、このふくし学習を通して、外に出かけたときに、体のどこかが不自由な人にあったときに、こまってたりしてることが、あったりしたら声をかけてあげたいなと思った話でした。

４年生の時に本当に目が不自由な人にあって、お話をきいたときに、「体が不自由でもかわいそうと思わないでほしい。」と言われて、私は体が不自由でも、かわいそうではないとしって、体が不自由な人への考えがかわりました。

優秀賞

人の大切さ

東郷小学校　郷田　結愛

私は、「共に生きる」の第二章を読んで心や体の変化がでて、わたしたちとちがいがあるなと感じました。年をとると、重いものをもったり階段をのぼったりするのが大変になります。他にも、目が見えにくくなったり耳も聞こえなくなったりし、ものをおぼえるのが大変になります。その時に手伝ってくれると助かる人がたくさんいるので、すぐ気づいて、助けたいです。そうすると、年をとった人もらくになるし、自分もやってよかったと思うからやっていきたいです。

年をとっているけど、そのぶん知恵や技能もたくさんもっています。昔の遊びを教えてくれたり、町の歴史についてくわしく教えてくれます。わたしたちよりもたくさん生きていて、昔のことをたくさん知っているので、不思議に思ったことなどを聞いてたくさんそのことを生かしていきたいです。

最後に年をとったからといって動けない・役に立てないわけではありません。お年よりの人は地域のために自分ができることを考えながらがんばっています。たとえば、小学生が安全に登校できるように道路に立ってくださっています。また、地域の花だんがきれいにたもたれているのも、お年よりのおかげかもしれません。わたしも、今は小学生でもいつかは大人になって、お年よ

りになります。わたしがお年よりになったら、自分にできることを考え、そのことをがんばりたいです。

優秀賞

私のおじいちゃん

東郷小学校　平山　芽唯

「ずっとずっと、わたしのおじいちゃん」を読んで、私もとも子と似たような経験があります。

私には、おじいちゃんがいます。私のおじいちゃんもこのお話のように最近おかしくなっています。一人で車に乗って変な所に行ってしまったり、事こを起こしてしまったり、ねぼけてケガをしてしまったりします。そんなおじいちゃんを見て、私は最初は心配だったけど、最近はだんだんきらいになっていました。前はそんなことなく、むしろやさしくて何でも買ってくれるおじいちゃんが大好きでした。私もとも子と同じように、

「おじいちゃんのことをそんな風に思っちゃうのはいやだな…。」と思ったこともありました。でも、おじいちゃんは私がひどいことを思っていても、いつもやさしく話しかけてくれます。今思うと、おじいちゃんは、やさしいんだなと思い、悪いことをしてしまったなと思います。

高れい者は、物わすれなどがひどくなると聞いたことがあります。だから、私のおじいちゃんも仕方がないことなんだなと改めて思いました。私も年をとったら、おじいちゃんみたいになってしまうかもしれません。だから、これからは、私もおじいちゃんにやさしくしていきたいです。そして、おじいちゃんと過ごす時間を大切にしていきたいです。

優秀賞

野球大会

自由ヶ丘小学校　井上　実祈

ぼくは、「野球大会」を読んですごいと思ったことは、事故で野球ができなくなった主人公のひろしが野球を好きな気持ちをもちつづけられたということです。交通事故で足を大ケガしたひろしは、野球はできなくなりました。しかしひろしは、野球を決してきらいになりませんでした。ふつうは、足を大ケガし好きなことが好きじゃなくなるかもしれません。でもひろしは、入院やリハビリの間、さまざまなしょうがいをもつ友達に出会い、おたがいに明るくはげまし合って生活をしていくうちに落ち込んだ気持ちから明るさを取りもどしています。だから、すごいと思いました。

残念に思ったことは、野球大会が開催され会場にいかず家にいたこ

とです。会場には、階だんなどが多く、車いすの人には通行がむずかしいと分かりました。さらに、会場のトイレは車いす式のトイレがありません。これに失望したひろしは、応えんにいくのをあきらめるしかできませんでした。もし、車いす式のトイレがあればひろしは会場に行った可能性がありました。あとスロープが多い所であればみんなに迷惑をかけることなく移動できるので会場に行ったかもしれません。

ぼくは、この話を読んでもしクラスにこういう人がいたら手伝っていきたいと思いました。気付いたことは、会場に車いすなどの人ができるだけ過ごしやすい工夫がされていれば、ということです。そうすればしょうがいのある人は少しでも行動や気持ちが楽になり、みんなと同じように過ごせるからです。今後は、どんな場所にもみんなが使いやすいトイレやスロープ等のせつ備が進めばいいと思っています。

優秀賞

「ともに生きる」を読んで

自由ヶ丘小学校　佐藤 平

ぼくは、「ともに生きる」を読んで、いろんな気持ちがありました。障害を持っている人も同じ人間だから、「この子は障害を持っているから」とか「へんなやつ」とか言う人が、へんなやつだとぼくは思います。耳が聞こえない人がいたり、目が見えない人がいたり、これから先、そんな人たちにたくさん出会うと思いますが、そのときどうすればいいのかを知っておかないといけないと思います。たとえば耳が不自由な人がいて、何か困っている時何かに字を書いて見せたり手話をしたりしてみると少しでも助かると思います。目の不自由な人が歩いていて気づいていないしょうがい物があったらどけてあげたり、道にまよっていたら道を教えたりすると、助かると思います。障害を持っているからって、特別あつかいしたりするのは良くないと思います。人はそれぞれ人権があって人権のない人なんていません。障害持っている人とは、少しちがうかもしれませんが、それはその人の個性であり、その人のいいところでもあります。それは決してかわいそうなことでもないし、はずかしいことでもありません。その人のよさをたがいにみとめ合い、支え合っていかなければいけないのです。

「みんなちがってみんないい。」これは金子みすずさんの詩の名前です。この言葉のようにみんなそれぞれ個性がありちがうからこそ、みんなのよさがあるんだなと思います。

みんなで支え合い助け合い、みんなで平和な世界を作っていこうと思いました。

「ともに生きる」はいろんな感情があり、言葉に気をつけて会話をして、言われたらどうなるかなど相手の

気持ちを考えて接することなどを学びました。
この本は、とてもすばらしい本でした。
ぜひみんなに読んでもらいたいです。これで差別などがなくなればいいなぁと思います。

優秀賞

ぼくのボランティア活動

自由ヶ丘小学校　早川　暖史

ぼくのボランティア活動を読んで、ぼくは一人ぐらしをしているおばあちゃんのことを思い出しました。
おばあちゃんも、一人でさみしそうにしてるしこのごろ物わすれもひどいから心配しています。おばあちゃんは、小さいころからぼくをかわいがってくれて、水曜日はだいたい学童へむかいにきてくれたりたくさんおせわになってます。とくに、毎水曜日にカレーをつくってくれて、とてもおいしくてパワーがでます。そんなおばあちゃんも、おじいちゃんがなくなって、一人で畑仕事をしたりおじいちゃんがやっていた事も一人でして、大変そうです。
ぼくは、ボランティア活動はしたことがないけれど、おばあちゃんのために手伝いをしたいです。たとえば、今ぼくがやっているのは、庭仕事で、落ち葉を集めたり、運んだりしています。この仕事だけでもとても大変です。
おばあちゃんは一人でがんばっているんだなと思いました。少しでもおばあちゃんが楽にすごせるように、お皿をあらってあげたり、畑の野菜をしゅうかくしたりなどボランティア活動ではないけどおばあちゃんのためにがんばりたいなと思いました。他にも、おばあちゃんがこのごろ物わすれがひどいからたくさん家に行ってあげて、たくさん話をしてさみしさをわすれて、楽しんでほしいなと思いました。
ぼくも、おばあちゃんの手伝いをしながら、ボランティア活動をして少しでも人のやくにたてたらいいなと思います。

優秀賞

自由ヶ丘南小学校　吉田　蓮

私は、ともに生きるという本を読んで、考えた事があります。それは、親切のつもりでも、人をきずつけてしまうかもしれないこと、体の不自由な人に「こわい」「きもちわるい」などと思うことはさべつだということです。
ここで私が考えたことは、「もし、自分が体の不自由な子だったら。目が見えなかったら。」と、さべつをしてしまっている人や、親切のつもりで人をきずつけてしまっている人

に、考えてもらうと、さべつをすることが、なくなるかもしれないということです。体が不自由な子に対して、ひどい言葉や悲しい言葉を言った人は、すぐわすれますが言われた人は、どうでしょうか。その言葉になやんで苦しみます。しょうがいがあるから「かわいそう」だとか「しょうがないよ」と思うことは、まちがっていると思います。親切のつもりでも相手はとてもきずついているかもしれません。だから、「いっしょにがんばろー」や、「がんばったね！」などの言葉を言ってあげたいです。しょうがいの子たちは、不便だけど不幸とは、思わないと思います。いろんな、やさしい人につつまれて、人生が楽しくなっていくのではないでしょうか。このように、しょうがいのある子たちは、親切のつもりでも、きずついたり、さべつをされたり、苦しいことが多いと思います。でも、こうやってさべつをしている人たちに知ってもらい、広げていくと、さべつをしたりすることは、なくなるかもしれません。しょうがいをもっている人だって、同じ人間なので、協力して、よりよい世界を作っていくのも大切だと思います。これからは、しょうがいがあってもとくべつではなくて、みんな同じ人間だから、協力して、ともに生きていこうと思います。

優秀賞

知らなかったですむことじゃない

玄海小学校　毛利　瑛太

『知らなかったで済むことじゃない』を読んで思ったことは、いじめは絶対にだめだということです。なぜなら、いじめをすれば、人を悲しませるし、いじめても、心はモヤモヤすると思うからです。

実は、ぼくも、似たような経験をしたことがあります。それまでずっと仲良く遊んでいた友達が、ゲームをしている時に、急に暴言を吐いたり、ぼくを仲間外れにしたりするようになりました。とてもショックで、落ち込んでいたら、ぼくのことを心配にして、友達が、はげましてくれました。ぼくは、その友達のおかげで、勇気がわいてきました。そして、暴言を吐かれても、そんなに気にせずに切りかえることができるようになりました。そんなふうに考えることができるようになったのは、ぼくをなぐさめてくれるやさしい友達がいてくれたおかげです。その後、少しずつ暴言を吐かれることもなくなり、いつしか、その意地悪をした友達とも仲良く遊ぶことができるようになりました。

ぼくたち五年一組では、学級目標を決め、みんながスマイルいっぱいになるように、仲良く協力して生活しています。ぼくは、絶対にいじめをなくしたいので、自分は友達にや

さしくしたいです。そして、もし、いじめが起きたら、知らない振りをせずに行動できる人でありたいです。

優秀賞

目が見えないという「不安」

玄海東小学校　井土 愛香

私は、4年生の時アイマクス体験をしました。アイマスクをして、一番最初に思ったことが「不安」です。アイマスクをした途端に真っ暗な世界に閉じ込められたかと思いました。だけど目に障がいをもつ人は、いつもいつもこの不安と戦っているんだと思った時、先生から、ペアを作って一人は、アイマスクをして、もう一人は、アイマスクをつけている人を連れて介護しながら学校を回ってくださいと言われました。その時私は、アイマスクをつけていざ歩き出した時周りに何があって今どこを歩いているのかわからなくなりました。その時、目以外の他の感覚が敏感になって、ちょっとした音まで聞こえるようになりました。私は、だんだん怖くなっていきました。いつも通っている道のはずなのに知らないところを歩いているようでした。自分が不安に包まれて行くようでした。一度だけ一人で、立ってみると、自分が今立っているのかすらもわからなくなってしまいました。階段にある手すりに手をかけず階段を降りているとすぐ転びそうになったり今寝ているのか立っているのかわからなくなってしまって、でもいつの間にか最初のところに戻ってきていて、その少し前まで歩いている時に、介護役の人に今どこらへんですかと、聞いていたら私が思っていたところよりだいぶ離れていて、目が見えないと方向がわかりません。もちろんどれほど歩いたのかもわからなくなってしまいました。そうやって感じたりしていると益々目に障がいがある方がすごいと思いました。そう思っていたときに主人公が目の障がいを受けたドラマが出てきて、見ていると物に当たってしまうのは、慣れているなどのことを言っていて、大丈夫なのかと思いました。私は、そのことを知って目が見えない人にとって大切な点字ブロックなどが、今までもあったところにも、もっと設置されて、目に障がいがある人達が住みやすい世界になったらいいなと思いました。

優秀賞

特別ルールは親切？

大島学園　金川 陽愛羽

私は、「親切のつもりでも」という物語を読みました。この物語はゆかりちゃんという主人公の女の子が、

目に障害を持っていて特別ルールを作られるというお話です。一見やさしそうに見えるルールでも、主人公は、自分だけ特別ルールで悲しかったというお話でした。

主人公の女の子は、左目に障害をもっているだけで、右目は見えていました。それなのに、なんで自分だけ特別ルールをつくられるんだろうと悩んでいました。私が特に印象に残っている場面は、とし子さんという主人公の友達が、ゆかりさんに対して、「ゆかりちゃんだけはいいよ。目が悪いから許してあげる。」といったところが印象に残りました。みんなとちがって、自分だけの特別ルールが作られると考えると、私でもいやだと考えたからです。とし子さんは親切なつもりで言っていたとしても、ゆかりさんにとっては、自分だけ特別じゃなくてみんなと同じようにあつかってほしいと考えていたと思います。私は、ただみんなとちがって目が悪いだけなのになんで、自分だけ特別ルールなんて作るのだろう、たった一つだけ人とちがうだけなのにと考えてしまいました。もし、私がゆかりさんのクラスメートだったら、一言温かいやさしい言葉をかけてあげたいです。

これから私は、ゆかりさんみたいな目が悪い人がいたら、とし子さんみたいに特別ルールを作るのではなくみんなと同じように接していきたいです。このお話は、障害があっても、特別ルールは作らずみんなと同じように接してほしいという障害者の気持ちが伝わるお話です。障害者の人の気持ちを分かってあげられるように、これからは、「大変そう」と思っても、差別は、しないようにしていきたいです。

優秀賞

福祉を勉強した私

地島小学校　浦川　芭菜

わたしは、福祉の勉強をしました。人権映画を見たりして、福祉のことについて知りました。今から初めて知ったことや心に残ったことを紹介します。

まず、介助犬のことです。介助犬は手足の不自由な人の生活の手助けをしてくれます。例えば、落ちた物を拾ってくれるなど、生活の中で不自由な事をサポートしてくれます。介助犬がいてもできないこともあります。自動販売機ボタンを押すこと、段差のある所に行くお手伝い、高いところにある物を取ることは介助犬にはできません。でも介助犬はサポートのいる人にとって大切な存在だと動画に出てきた人が言っていました。

二つ目は、特別支援学校について

です。特別支援学校は、一クラス平均三人で、少人数教育をしているそうです。自立活動という勉強が行われていて、文章を書いたり言葉を覚えたりする活動があるそうです。ほかにも、普通の学校でもやる国語や図工、家庭科で野菜を切ったり、習字をしたりもするそうです。「普通の学校ですることでも、体が不自由な中やっているのはすごいな」と思いました。「目の見えない人はどうやって習字や文章を書いているのか調べてみたいな」とも思いました。三つ目は町の工夫です。障害のある人のために、商品に点字を付けたり、車いすの人のために段差をなくして坂にしたり、点字ブロックを設置したりするなど、よく見ると町にもいろいろな工夫があることがわかります。

　このように、町にいろいろな工夫があったり、介助犬という障害がある人をサポートする犬がいたり、障害がある人も特別支援学校というところで一生懸命勉強したりしていることがわかりました。

　最後に、今、私は「手話」という耳が不自由な人と手でお話するやり方を覚えています。耳が不自由な人にとって手話は、本当に大切な存在です。だから、私も手話の基本ぐらいは覚えて、耳が不自由な人の役に、少しでも立てたらいいなと思っています。もし、実際に障害をもっている人に出会ったら、何か手伝うことがないか、困っていないかとか、声かけをしてみたいなと思っています。

令和４年度

福祉絵画コンクール
受賞作品集

社会福祉法人　宗像市社会福祉協議会

金賞

中学生の部

「思いやりの花咲かせよう」

自由ヶ丘中学校
加藤　咲太郎

金賞

小学高学年の部

「差し伸べた手がつなぐ未来」

日の里東小学校
岩本　雛乃

金賞

小学低学年の部

「助け合って
くらしやすいせかいへ」

河東小学校
大圃　遥人

金賞

幼児の部

「ひいおばあちゃんとぼく」

日の里幼稚園
平川　元翔

銀賞

中学生の部

「一瞬の行動力が、
一生の感謝に」

日の里中学校
伊藤　千廣

銀賞

中学生の部

「できる事から始めよう」

大島学園
宮本　彪斗

銀賞

小学高学年の部

「みんなでスマイル」

自由ヶ丘南小学校
福山　ひまり

銀賞

小学高学年の部

「思いやりを大切に」

玄海小学校
仲野　宝華

銀賞

小学低学年の部

「あふれるやさしさ」

日の里西小学校
江尻　彩

銀賞

小学低学年の部

「いつまでも　元気にいてね」

自由ヶ丘小学校
谷口　雅仁

銀賞

幼児の部

「ずっとずっと元気でね！」

野ばら第二保育園
関根　ゆず

銀賞

幼児の部

「おねえねとおにいに
だいすき！」

東郷信愛幼稚園
川上　結梨

銅賞

中学生の部

「世界と共に生きる」

河東中学校
松木　亜湖

銅賞

中学生の部

「前へ″進めない″」

日の里中学校
井上　彩乃

銅賞

中学生の部

「福祉のパズル」

城山中学校
久保　桃花

銅賞

小学高学年の部

「自分に出来る事」

南郷小学校
岡田　桃果

銅賞

小学高学年の部

「久しぶりに会った
じーじとばーば」

自由ヶ丘南小学校
藤木　入李

銅賞

小学低学年の部

「すみやすい町」

河東西小学校
髙野　叶絵

銅賞

小学低学年の部

「みんな なかよく」

赤間西小学校
追木 奏人

銅賞

小学低学年の部

「えがおのひまわり」

東郷小学校
古賀 咲愛

銅賞

幼児の部

「おにいちゃん、
いつもありがとう」

博多のびっこ幼稚園
鈴木 望華

銅賞

幼児の部

「ママといっしょに
あそんでたのしいな」

浄徳寺幼稚園
下妻　百花

銅賞

幼児の部

「おじいちゃん、
おばあちゃんと
一緒に行ったお散歩」

野ばら保育園
元日田　陽

銅賞

幼児の部

「大好きな家族」

日の里西保育園
西橋　ひかり

銅賞

幼児の部

「ともだち だいすき」

玄海風の子保育園
宮本 結珠愛

令和4年度
福祉教育読本「ともに生きる」感想文集
福祉絵画コンクール受賞作品集

発 行 年 月 ／ 令和５年２月

作成･発行者 ／ 社会福祉法人　宗像市社会福祉協議会
福岡県宗像市久原 180 市民活動交流館メイトム宗像
Tel：0940-37-1300　Fax：0940-37-1393
E-mail：info@syakyo.munakata.com
ＵＲＬ：http://syakyo.munakata.com